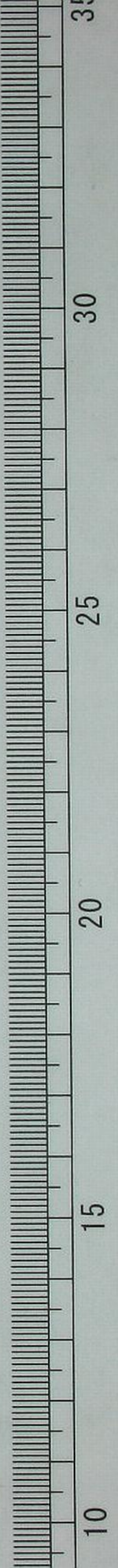




牙
文
俗
語
四

= 5
2364
4



門 二五
號 2364
卷 四



談卷之四

目錄

金神之事

人日之事

年歲差別之事

須弥山之事

朔且冬至之事

早稲 大學 圖書館
第 30.2.23 號
藏 書

天文俗談卷之四

金神之事

金神えんがみといふもの、鬼門きもんよはて人のあはれをよのけり、鬼
 門きもん乃事なごも居まゐ行子ゆきこ後編ごへん小出せうしゅつきハその説せつとて、ゆゑ金
 神かみかみいふもの、神かみなれぬ諸人しよじんかくあはれを事ことや、世の説
 ばくまき曰い今昔いまむかしハ夜よ又國くに巨旦こたん大王おほきみの精靈せいりやうなりといふ
 説せつ蓋ふた蓋ふたよ出いつまことと熊牧くまかひも、市語いちご因よ於にて一向いひやく
 といふとす、まにあはれ、ゆゑ乃な并なら陸陽りくやう方の通書つうしよ大全

永寧通書曆例 曆林同答 陰陽書五行書の諸書

りと方位と其の一配當するの説ハあもも其神

水何等神神の一配當するの説ハあもも其神

西方葦收金神白毛虎爪珥蛇執鉞專司無道又

國語小云魏公夢在廟有神人面白毛虎爪執鉞西方白

虎金正官とすと列仙傳張道陵傳小云西域房陵間有

白虎神好飲人血と此等の説を據こゑくするがらハ

から然ますも鬼門と曰く右の説はいつもも其とするがらハ

からさらの説はり或説は庚申の神と曰神の一配當する

小と庚申の神と猿田彦太神の一と配當する

も西方の一と配當する故は今も其とするがらハ

金神七殺しの一配當する陰陽家所謂七の一配當する

金と殺しの一配當する陰陽家所謂七の一配當する

金と殺しの一配當する陰陽家所謂七の一配當する

金と殺しの一配當する陰陽家所謂七の一配當する

金と殺しの一配當する陰陽家所謂七の一配當する

小もせよ馬^{うま}蒙^{もう}の人^{ひと}も理^りと疎^そらう一^{ひと}ふてあ^ある事^{こと}
か^から^らく^くあ^ある^るゆ^ゆ一^{ひと}つ^つ乃^乃一^{ひと}あ^あら^らう^う領^{りやう}曆^{りやく}よ^よあ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う
一^{ひと}こ^こり^り中^{ちゆう}國^{こく}史^しよ^よあ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う
鬼^{おに}門^{もん}と^と同^{どう}く^く一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う
一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う
只^{ただ}表^{ひら}し^しも^も一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う
心^{こころ}中^{ちゆう}一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う

人日之事

正月七日^{しちにち}人日^{にんじつ}く^く一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う
物^{もの}紀^き系^{けい}一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う
京^{きやう}二^に日^{じつ}物^{もの}一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う
一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う
其^{その}日^ひ天^{てん}氣^き暗^{あん}明^{めい}温^{おん}和^わ分^{ぶん}一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う
天^{てん}氣^き一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う
耗^{しょう}す^する^る物^{もの}一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う
東^{とう}方^{ほう}朔^{しやく}ハ^ハ漢^{かん}の^の武^ぶ帝^{てい}純^{じゆん}長^{ちやう}一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う一^{ひと}あ^あら^らう^う

始るなり

歳年差別之事

年と歳とはお同一なり、然るも差別ありや曰差別
 有り年一の字を禾一歳りて熟とる、成、稔の字
 二同一意なり、穀熟とるを稔とる、正月より十二
 月迄人の一年なり、歳を越の字も意味故の限、
 越の意なり、星一歳りて周旋故の限、小なり
 有り、こゝに太歳神も木星の精霊一歳の事

小十二方と先づ言ふ、始り成り終り一歳、小一
 周、故に其の字成なり、歩、小なり、歳の字と成り
 冬至日、輪南至、乃極なり、始り翌年の冬至と小一
 歳終り、天の一歳なり、ま、小と一祀と書く、一年
 乃事、用、白、赤、の、り、經書、よ、足、り、祀、を、一、歳
 名、祀の、徧、く、す、む、と、て、の、為、小、なる、も、載、の、字
 と書、事、も、あり、載、を、年、め、り、と、し、始、り、り、小
 ら、し、も、り、る、字、の、り、故、に、物、終、り、始、り、の、為、よ、り、る

爾雅にが夏乃代か一も歳としの代しろも記し
以周しゅう文代ぶん六年ごくといひ堯舜ぎょうしんの代しろ六載ろくざいといひ
阿含あかん經ぎょう小切せうせつより須弥すみ乃四方なほしやうは四列しりよくといひ日月にちげつ中ちゆう東とうは
横よこに列りよくする四列しりよくといひ西せいも牛賀ぎうが列りよく南なんも瞻部せんぶ列りよく東とうは

須弥山之事

或問あるいもんいもく佛説ぶつせつは須弥山すみせんといひ説せつを立たてて世衆せしゆの理りを説せつむれ由よし俗用じやくようの節用せつよう集しゆれりりよよ世のせ圖ずを生なす
よの多たし天学てんがくにいしつと大だい殊しゆなりなり佛説ぶつせつより
まは天学家てんがくか小せうしつと大だい殊しゆなりなり佛説ぶつせつより
曰いは佛家のぶつけ経ぎょうハハみか方便はんべんの事ことなりなり須弥すみ乃なほ説せつを長ちやう
阿含あかん經ぎょう小切せうせつより須弥すみ乃なほ四方しやうは四列しりよくといひ日月にちげつ中ちゆう東とうは
横よこに列りよくする四列しりよくといひ西せいも牛賀ぎうが列りよく南なんも瞻部せんぶ列りよく東とうは

勝神列北も具盧州なり仙家よて須弥と三衆九山
八海ともいふ云々も衆も衆欲衆の天と云々も衆を
四室處ともいふ身かきを所て定むる方處なり
色衆十七天なり其下に欲衆移くありと都て二十三
天と云たるもの如く東面も白南面も青西面も赤北
面も黄なり如斯乃執して移くの説を建全躰哉靴の
朋龍ぶとくに圖して世の中衆を日月横かめぐる
あつらひの如く然ることも方便乃説少して天地の形

象とハ行々なる事なり五十年より已前ニ城列松尾
住する僧あり博識少くまことに信昌氏の豪傑
かり須弥の説をその中華古学法天学に合せん
に欲して百計の術とて世にも思ひと尺のそめて其
説終小なりすして是れ後二十年よりして極
其口索を不文雄といふ僧なり九山八海解嘲論といふ
書一冊著述して以説を乃て天学家の説を世に
る世の説一尋の便法なりて而世の此井を汲る

用々其の短さを見下して世井小ハおがーこい
小未くもるのさー強くは説と補して天学家も
書ふらし又常列の人小不條居士といふ人可護
法資治論といふ書と著すそのらに必須弥の出
と説説と中学乃天学家を駁しその終小いこく大
抵世天文地理之説皆可思議之法也佛家説得示
可思議要非思量分別之所能解方便品曰是法非
思量分別之所能解故其每説廣龜無邊元來出世

之教如此若求盡其分數非所以知彼矣とて之
按す小佛説カさく改行事して其の云く真旨
キる妙を皆思量分別の解する事に行らるる中
も余理の云く小いりてハ文字言語の及こ海小所
或同解天学指要書よとをいふとて天地の形象ハ
目前測量晷測の器とて量得て觀る事とのあり
や近すて之を思議す金とて其の説を信せんや不條
居士の説乃須弥山とて方便小いりて其證小方便

品を引おこしに耳を掩て鈴を盗がぶと〜鐘くみる方
 便のあり多〜須弥も亦方便の説〜して大不可解の理
 文〜事六別べつのありあり〜して中華の天学てんがく小以ひと〜と
 いろいろ古昔の天学家の説の〜らに蓋天の説かふてん北極を
 天頂てんてい〜して赤道を天睡てんすいとすも日月地平ちへいの上下を横
 しまつらるゝのまじの〜とす〜く似ても〜も全幹大よ
 超語たごすその餘を總そう〜と似たる観かんも如〜寧測ちやうそく小わとさ
 ら事ハ〜ふ空論の〜天学の門不入人ふわ〜と〜ハ

小〜を従て注が〜故よその大綱と首をひの〜

朔旦冬至之事

本朝の朔しやく小朔旦冬至〜と注〜所しよハ朔旦しやくたんい〜ひ有
 事ふ〜清和天皇貞観二年しん庚辰十一月冬至を
 了〜して国十月の小城こじやう注多大と如〜して冬至を十一月
 朔しやく小〜して朔旦冬至注嘉儀乃儀式ぎぎしきあり〜事あり
 八十二代土御門俊建仁二年小も此例この小あり〜して
 嘉儀あり〜事あり〜如〜い〜ひ平〜ふ〜い〜

つるありや曰^い海^{うみ}は朔^{しやく}旦^{たん}冬至^{とうじ}といふハ十月朔^{しやく}
日^ひ乃^{すなは}前^{まへ}夜^よも夜^よ半^{はん}子^しの正^{せい}刻^{こく}後^ご寅^{いん}時^じまでハ冬至^{とうじ}
の刻^{こく}限^{げん}れありは十九^{じゅうく}年^{ねん}と曆^{れき}の一章^{いちやう}として
修^{しゆ}古^この粗^ろき曆^{れき}法^{ぽう}かまは其^{その}の毎^{まい}より一^{いつ}つれ
こも世^よと逐^おて曆^{れき}法^{ぽう}くわを如^{ごと}くしりては曆^{れき}法^{ぽう}
ありは十九^{じゅうく}年^{ねん}ありて朔^{しやく}旦^{たん}冬至^{とうじ}にある事^{こと}
あり然^{しか}も十九^{じゅうく}年^{ねん}ありは十月朔^{しやく}
朔^{しやく}日^{じつ}は冬至^{とうじ}といふありて朔^{しやく}旦^{たん}冬至^{とうじ}といふ

よて嘉^か丁^{てい}といふも朔^{しやく}日^{じつ}冬至^{とうじ}ありて和^わ邦^{ぱう}其^{その}の志^し
らにも朔^{しやく}旦^{たん}冬至^{とうじ}といふ朔^{しやく}旦^{たん}冬至^{とうじ}といふ賀^が漢^{わん}土^どは於^おて其^{その}の例^{れい}と
り、事^{こと}あり朔^{しやく}旦^{たん}冬至^{とうじ}に賀^が漢^{わん}土^どは於^おて其^{その}の例^{れい}と
あり次^{つぎ}歴^{れき}代^{だい}乃^{すなは}若^{わか}に其^{その}の例^{れい}とあり疑^ぎあり斯^{かく}
和^わ例^{れい}ありは江^{かう}次^じ才^{さい}小^{せう}朔^{しやく}旦^{たん}冬至^{とうじ}の宴^{えん}會^{かい}を桓^{くわん}武^ぶ
天皇^{てんかう}乃^{すなは}延^{えん}曆^{れき}二年^{にねん}十一月^{じゅういちがつ}戌^{しゆ}戌^{しゆ}朔^{しやく}慶^{けい}賀^がを行^{おこな}はせし田^{でん}
租^そと免^{めん}する事^{こと}其^{その}の始^{はじめ}なりといへり只^{ただ}冬至^{とうじ}に賀^がす
る事^{こと}ハ漢^{わん}土^どありの例^{れい}あり事^{こと}物^{ぶつ}紀^き原^{げん}ハ玉^{ぎよく}燭^{しやく}寶^{ほう}

典ひんが引ひて曰い冬至とうじ陰陽いんやう百物ひやくぶつ之始のし日極南影長有ひごくなんえいなが
 履長之慶りんちやうのえい漢雜事かんざつじ小せう曰い冬至とうじ陽生君子やうせいくんし
 道長故賀ちやうぢやうこゝろとあるを記すしる漢制かんせいの如ごとく
 江次かうじが曰い冬至とうじの宴會えんかいハ聖武皇帝せいぶてい神龜二年しんきに
 十月じゅうがつ巳丑ししう天皇御于大安殿てんかうごおんたいあんてん受冬至うけとうじ賀辭がじとあり
 冬至とうじにして思おもへば冬至とうじが一陽來復いちやうらいふくして陽の徳とくが
 に長ながずぬる好よくことなりて和漢わかんにもいふを故ゆゑ
 賀がする事ことと見えたり天の一歳てんいつさいの肇はじりたることにて

最も賀がすへき日ひなりと知る一い叔朔旦しやくしやくたんの刻限こくげん小せう同どう
 あり天学の書てんがくおとりのこと小物せうぶつの説せつも皆みな愚ぐり天
 学指要てんがくしゆいようにもおの説せつとあり然しかしこと天学てんがくによら
 ざる人の為ために次ついでにわたりてかゝるんこと
 夏の代なつハ寅月いんげつとありて歳首さいしゆとす今いまハ正月しんげつと同
 事ことなり殷いんの代だいハ丑月しうげつとありて歳首さいしゆとす周しうの代だい
 小正月せうしんげつとありて歳首さいしゆとすい夏殷周かいつしうの三正さんせい
 といふ周正しうせい子の月しと用もちて正月しんげつとするい此こゝハ夜半やはん子

の正刻こゝをとりて朔旦とすなりする設正丑の月と
用て正月とするは丑の正刻をとりて朔旦とす
夏正寅の月を用て正月とするは寅の正刻とす
て朔旦なりから丁をとりめり

天文
入文

